八代市文化協会機関誌

文化やつしろ

目次

表紙写真　甲田　智之

《巻頭言》
一年を振り返って　八代市文化協会会長　福田　秀俊　3
平成二十七年度「文化庁　地域文化功労賞」受賞
受賞者　八代市写真連盟　麦島　勝氏　4
地域文化功労賞　受賞に寄せて　麦島　勝写真の魅力
八代市立博物館未来の森ミュージアム　学芸員　石原　浩　4

文化祭特集
平成二十七年度　八代市文化祭　開催
オープニングに秀岳館高校の「雅太鼓」演奏……5
文化祭短歌大会開催される　八代歌人懇話会　太江田妙子　6
菊この一年……八代菊友会　續　司　7
文化祭を終えて　紫洲流日本明吟会熊本本部　西田　紫岱　7
写真で見る「文化祭」……8・9・10・18・20
花をたずねて「花逍遥」八代華道連盟　池坊　中島　陽子　9
文化祭実行委員一年生……日舞百合の会　藤間　州為　10
文化祭を省みて（反省会より）……11

《文化を想う》
わたしの九年間を振り返って
西崎流路の会　鏡中三年　蔀　優里　12
硯との出会いと愛硯　熊本県書道連盟会長　江口　幹城　14
チャレンジ……日本民謡八代尚和会　久保田尚夫　16
大正琴と私……あすなろ琴KOTO和会　松田　洋子　17

《会員の活動》
織るということ……井上伝統手織教室　井上　典子　18
八代盆栽愛好会のこと……八代盆栽愛好会　畑中　正人　19
第十回八代おざや節全国大会を終えて
日本民謡協会八代支部　支部長　椿　日登美　19
「歌の街へ　ようこそ！」丸七年♪
コールアニマ　村井　智子　20

《会員広場》
初心者……熊本県文化協会協力会員　増田　國夫　21
研修旅行に参加して
紫洲流日本明吟会熊本本部　松山　和鳳　22
秋の研修旅行……八代市合唱協議会　靏池千佳子　23

史話連載
知っているようで知らない八代の史話
大陸との貿易港「徳渕の津」……萱嶋　義邦　24

《伝統文化》
文化庁　伝統文化　親子教室発表会　盛大に
平成二十八年一月十六日(土)　厚生会館で開かれる　24
写真で見る「文化庁　伝統文化親子教室発表会」……25
こども達に感謝……植柳盆踊り保存会　野﨑　陽子　26
広告募集……24　原稿募集……26
「表紙の言葉」……27　編集後記……27

（撮影・甲田智之）

巻頭言
一年を振り返って

八代市文化協会会長　福田秀俊

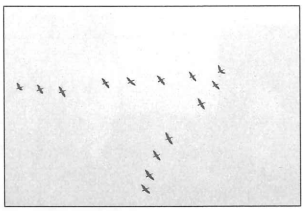
早いもので、もう平成二十七年度も終わってしまう。

今年度を振り返ってみると、文化祭、文化協会研修旅行、文化祭反省会とたて続けに大きな行事があり、さらに音楽関係では九月のオペラ「椿姫」、その後合唱団の定期演奏会、市民合唱祭、公民館祭、クリスマスコンサートと様々な行事、演奏関係が行われた。さすがに消耗した感じがある。

多忙さに押し流されると自分の中が空っぽになったような感じにさえなる。ほっとしている今が貴重な充電期間である。

柔らかく柔軟な心を保つために…一に「音楽を聴くこと」年末には様々な地域の音楽が放映されたり、演奏会が行われたりする。できるだけいいものを探して鑑賞することが新たな感動を呼ぶ。感じたり、心を揺さぶられたりすることでエネルギーがわいてくるような気がする。「題名のない音楽会」というTV番組があるが、今まで佐渡　裕さんが総合司会、指揮をやっていた。今回、五嶋龍さんがその司会、演奏を変わられた。

ちょうど二〇一五年の五月に熊本で彼のヴァイオリンの演奏を聴くことができた。アメリカ生まれで三歳よりヴァイオリンを母親（ヴァイオリニスト）の指導ではじめ、七歳の時、佐渡　裕さんの指揮で共演コンサートを行いデビューした。姉もヴァイオリニストで有名な五嶋みどりさんである。



彼がユニークなのは、プロのヴァイオリニストであるにも関わらず、大学はアメリカのハーバード大の物理学専攻である。また運動では空手三段を持っている、まさに文武両道である。体も筋骨隆々である。そのような彼の奏でる音は力強く、繊細で大変感動した。

次に「自然を見たり感じたりすること」

今は冬場なので自転車で走るより、歩く方が気持ちがよい。よく川辺を歩くが、水鳥や野鳥が目につく。クロ面ヘラサギもちゃんと来ているし、今年はカモがたくさん目につく。

また夕方になると鵜の大群が編隊を組んで自分たちのねぐらに帰っていく。V字型になって飛んでいく。多分球磨川の河川敷上流に帰っているのだろうと目星をつけ車で行って、待機していた。案の定大群が帰ってきた。河川敷を越えて少し坂本よりに降り立っていた。

この群れがおもしろい。ある一群は先頭の鵜を頭としてきれいにV字型になり整然として飛行している。見ていてもきれいだなと感じる。よく先頭についてきれいに並べるものだと感心する。またある一群は先頭争いでぐしゃぐしゃになって、とうとうまとまらずに帰ってしまう。またある一群はまっすぐ一列に並んで帰っている。それぞれの群れによって違うものだ。よく統制された集団、てんでバラバラの集団、ただまっすぐに並んでいる集団、なにか人間社会の集団を見ているようで感心するやら、考えさせられるやら興味深いものである。

興味深い音楽を聴いたり活動したり、また日々の生活の中で様々なものを観察することによって感動したり、考えさせられたりすることによって、心を癒し、また新たなるエネルギーを得ながら、今後の活動に生かしていきたいと思う今日この頃である。

平成27年度「文化庁 地域文化功労賞」受賞

八代市写真連盟　麦　島　　勝 氏

昨年の県民文化賞に続き、国から「地域文化功労賞」を受けられました。

心よりお祝い申し上げ、功績を讃えます。

地域文化功労賞　受賞に寄せて
麦島　勝　写真の魅力

八代市立博物館未来の森ミュージアム　学芸員
石　原　　浩

●地域文化功労者表彰

「地域文化功労者表彰」とは、全国各地域において、芸術文化の振興や文化財の保護、地域文化の振興に功績のあった個人や団体に対して、その功績をたたえて文部科学大臣が表彰するものです。

平成二十七年度の被表彰者は八十六件、このうち熊本県からは長年カントリーゴールド実行委員会会長をつとめてこられた永谷（チャーリー）正輝さん、熊本県の民俗文化研究の第一人者である佐藤征子さんとともに、八代の写真家麦島勝さんが表彰されました。

●ありふれた「日常」を撮る

麦島勝氏は、昭和二十年代より郷土八代を中心に、熊本、阿蘇、天草、球磨など、県内各地に暮らす人々を撮り続ける写真家で、八十八歳になった今でも現役で活躍しています。

他のカメラマンに「無駄なものばかり撮って…」と言われながらも麦島氏がこだわったもの、それは至極ありふれた「日常」の営みです。しかし、そのありふれたものが数十年の時を経て黄金色の輝きを放つことを、麦島氏以外誰が想像できたでしょうか。これこそ麦島勝写真の魅力であり、氏の写真が高く評価される所以なのです。

平成二十六年、木村伊兵衛や土門拳など日本を代表する十九人の写真家のひとりに麦島氏が選ばれ、彼らの写真による展覧会『写真が捉えた昭和のこども』（クレヴィス企画）が全国の美術館を巡回、写真集も出版されました。麦島氏は、ここにきて木村伊兵衛や土門拳と肩を並べる写真家となったのです。

麦島さんの作品

●デジタルアーカイブ事業

昨年、麦島氏所蔵の写真が八代市立博物館に寄贈されました。過去の寄贈作品と併せて総数四三六九点、麦島氏の写真人生を網羅するコレクションとなりました。これを受けて博物館では、麦島勝写真デジタルアーカイブ事業を立ち上げました。寄贈写真のデータ整理とスキャンニング作業を進め、本年度は一三〇〇点の画像を博物館ホームページで一般公開します。

麦島勝写真は、作品として楽しめるばかりでなく、歴史や民俗、はたまた自然科学や経済産業の分野まで、多彩なニーズに応えるデータベースとしての活躍が期待されています。デジタル主流の時代になって尚、麦島勝写真への注目度は高まるばかりです。

文化祭特集

平成二十七年度 八代市文化祭 開催

十周年記念に秀岳館高校賛助出演

福田秀俊会長

八代市文化祭が、平成二十七年九月十五日の書道展を皮切りに、十一月八日の市民合唱祭までの三ヶ月間に亘って開催された。

市立博物館、厚生会館、ハーモニーホール等を主会場に開催され、舞台部門、展示部門などの様々な催しに七十一団体、述べ出場者数一六一四名が日頃の鍛練、活動の成果を発表した。

開会の式典は、十月三十一日、ハーモニーホールで行われた。今年は八代市合併十周年記念の年と言うことで、十時からの式典開催に先立ち、オープニングに、秀岳館高校太鼓部による、伝承芸能「雅太鼓」が演奏され、会場を盛り上げた。

また、文化協会常任理事の方々による、八代市民愛唱歌「わたしのまちは」が振り付きで合唱され、好評であった。

太鼓の余韻を心に残したまま、式典が開会され、先ず、主催者の中村八代市長より、「文化力は、他の様々の活動に活力を与える。文化発展の環境整備に努める」と言う有難いお言葉を頂く。次に福田文化協会会長より、「十周年の喜びを皆さんに伝えるために『わたしのまちは』をやりました」との挨拶。次に鈴木田市議会議長の挨拶、県議会議員や協力会員など、来賓紹介が行われ、式典終了。

オープニング　秀岳館高校の「雅太鼓」演奏

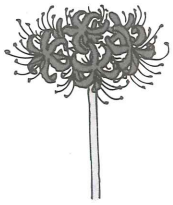
終了後、来賓の皆様や、会員の方々には、茶道部門の方々によるおもてなしの抹茶が振る舞われた。

後は、ステージに於いて、民謡、フラダンス、吟詠、伝統芸能、洋舞、器楽などが披露され、二日間に亘り、会場は熱気に包まれた。また同じハーモニーホール一階展示場に於いて、盆栽、水墨画、寒蘭、イラスト、押し花、手織りの展示、三階の展示室では、華道展が行われた。特に生け花の展示場には、昨年まで元気にお花を指導され、「文化やつしろ」にも原稿をお寄せいただいた故稲田ユキエ先生の写真に献花が、昨年と同じ場所に活けられていて、少し目頭が熱くなった。また中村八代市長が、生け花の体験教室で活けられた花が、受付に置かれ、注目を浴びていた。

オープニング「わたしのまちは」常任理事

師の遺影最中に置かれ文化祭生花展しばし浄土の如し

（太江田・記）



文化祭特集

平成二十七年度 八代市文化祭短歌大会 開催される

八代歌人懇話会　太江田　妙　子

平成二十七年度八代市文化祭短歌大会が、十月十二日(日)八代市代陽公民館に於いて開催された。

総出詠者数三十五名、当日来場者二十七名、会員の増減は在ったものの、昨年より二名多い参加であった。今年は、短歌大会は午後からと言うことで、会場を午前中は、フラが練習をしておられた。

準備の時間が無く、急遽、控室にと用意していた部屋で行う事にしたが、広さなども丁度良く、話も良く通り、親しみも持てて「来年から狭い部屋でも良いね」と言うことになった。

人生すべて「塞翁が馬」である。巧く行くときはうまく行く。と納得。

主催者による挨拶の後、参加者に前もって互選をして頂いた得点の結果発表があり、次いで高得点歌の発表、合評、その後三人の先生による分担評があり、全作品について、丁寧に批評が行われた。こうしてみると、読み落していた良い短歌が沢山あり、心残りだった。

それでも短歌会が終わると「いつもより親しみも持て、気持ちも伝わり、愉しかった。良かった」と語られ、愉しい裡に終了した。

◎二十七年度短歌大会入賞作品

天賞　廃棄せむと決めし書籍の一冊に傍線赤き亡夫のペン跡　石田　和子

地賞　台風に揉まれ折れ伏す早生稲を妻は抱き上ぐ児をあやすごと　葉山　高弘

人賞　中支なる土地に果てしと言ひしのみ母は生涯父を語らず　高木　容子

人賞　零細の家業いか程知りうるか継ぐと言う息子の双肩見守る　林　良子

秀逸　幼き日覚えし軍歌想ひ出ず今にして知る歌詞の悲しみ　松岡　淑子

秀逸　敬老の祝いで踊る「かたつむり」這う児笑う児ぐるぐる廻る児　岩城恵美子

秀逸　認知症の夫にいらだち振り返り吾が心根の貧しさを悔ゆ　木下スミエ

佳作　虹色を映した翅を吾に見せ滝の飛沫に蝶は消えゆく　吉野　佳子

佳作　荒瀬ダム撤去の進み再びのみを筋つなぐ青きせせらぎ　頼藤小枝子

佳作　夏の来て青田を渡る涼風は戯れるごと波紋を描く　白石江津子

佳作　横綱と書いてありたり誕生日ホームの夫は九十七歳　高吉みどり

文化祭特集

菊この一年

八代菊友会　續　司

十一月は、紅葉と菊花の香る季節であるといわれるように、会場となっている八代宮境内にも、勝るとも劣らない香が漂うのを感じてもらったと思いますが、この一年を振りかえってみますと、昨年より続くエルニーニョ現象が今夏（平成二十七年夏）も昨年同様に天候不順をもたらし、梅雨明けも七月後半となり、八月上旬は猛暑となりましたが、中旬以降は曇天日が多く、台風十五号の被害もあり、展示会の開催が出来るか心配したのですが「天道人を殺さず」ということわざもある様に、九月中旬より菊愛好家が求めている秋の気候に近くなり、待ってましたと根、茎、葉が充実して木性に勢いがつき開花に進む過程が早くなり、咲きが逆に展示会期間前に満開を過ぎるのではないかと反対の心配をしましたのですが、なんとか踏み止まり盛会に終りました。しかしながら、菊栽培を取りまく環境は全国的に厳しさを毎年増していると各地の会の声も多くあり、私も年々感じる様になっています。今後は、悩まないでよい平穏な気候を願い、準備と技術を磨き、各方面から、さらに多くの観菊者に足を運んで頂くのを夢みて、体力を維持し、この道を生き甲斐として精進して行きたいと思います。

文化祭特集

文化祭を終えて

胸がすかっとした達成感!!

紫洲流日本明吟会熊本本部　西田紫岱

今年の八代市文化祭の舞台部門は、秋冷の菊花盛んな十月末日から二日間、ハーモニーホールで行われました。一階には、盆栽展や秋のラン展で華やかさを添え、市民の方々も多く観覧に来ておられる中、私ども吟詠の会の出吟は二日目の午後に割り当てられていたところです。

幕あいで待つ間、皆さん軽い緊張感に包まれ一時的に若返った気分を味わったものです。

時間が流れ出番となり、まず客席を観渡してみると昨年とは異なり、沢山の方達が席に座っておられるのを観たとき内心ほっとしました。

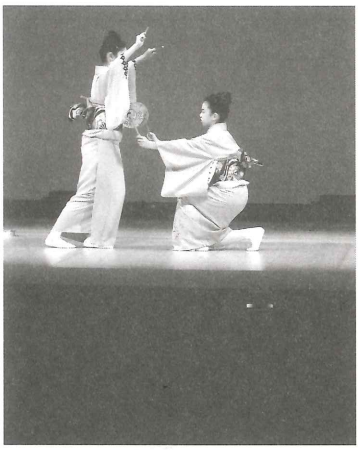
いつも思うことですが、客席ががらんとしていると、今ひとつ出吟者も気合いが乗らないものです。今回は心から声を張り上げ、吟じ終えたときは、胸がすかっとした達成感を全員が味わうことができました。

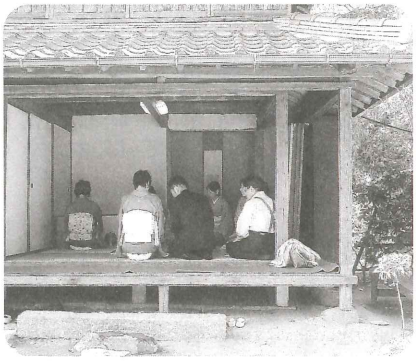
吟は、大声を出して唱うことで、ストレスを発散し健康を維持する為の大きな要因の一つと言われております。長寿社会の現在、少しでも健康で、毎日を暮らされたら幸いです。

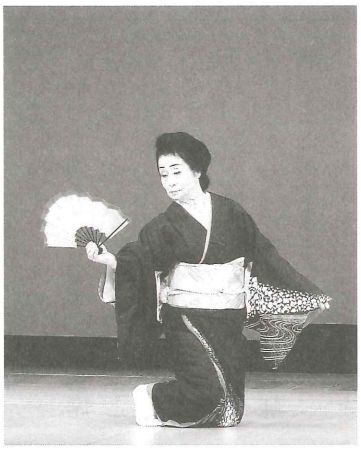
吟詠は、昔は難しいと誤解されていた時期もあったようでしたが、私どもの会は新しい方法で優しく指導しております。

新規入会者を歓迎しておりますので、どうぞご自由にお訪ねください。

写真で見る文化祭







第57回 熊本県芸術文化祭参加事業
平成27年度 八代市文化祭
主催／八代市・八代市教育委員会・八代市文化協会　主管／八代市文化祭実行委員会

文化祭特集

花をたずねて「花逍遥」

文化祭華道展を終えて

八代華道連盟　池坊　中島陽子

今年の秋は、例年になく寒気の入りが遅く、木々の色付きが気になりながらの平成二十七年度文化祭「華道連盟いけばな展」の開催となりました。今回は「花をたずねて花逍遥」という、サブタイトルが付きました。この美しい花逍遥というのは、花や木々が咲いている所を気ままにあちこち歩きまわることで、都市化が進み、野山や水辺などの身近な自然にふれる機会が少なくなってきている今、古くから日本人が美しいと感じ、草木が自然の中で生きる姿を改めて見つめ直す必要があるのではないかと、今年国の「花き振興に関する法律」が制定されたことに基づき、花きにちなんだ地域ブランドを育む目的で、華道家元池坊が全国の教授者や一般に公募し、当会相談役池坊准華老甫新開よしえ師により応募された、松井家の松濱軒が未来に残したい花風景「花逍遥百選」に見事に選ばれました。

趣のある日本庭園、池に咲く花菖蒲を代表とする、様々な花や木々が市民の誇りとなりました。松井家当主様に松濱軒のお庭の見えるお部屋にて、市の関係者の皆様や連盟会員代表者の集まりの中、池坊八代支部長より認定書が授与されました。このことはテレビのニュースや新聞にも取り上げられ、八代には全国にこんなに誇れるお庭がある幸せを感じて、文化祭もいつにもまして、皆心を込め参加する事が出来ました。池坊、小原流、未生流、真生流、それぞれの流派の特徴を活かした花型や花器に季節の木々花々を思う存分に発揮し、生けた中身の濃い花展となりました。

華道展

ただ、その中の一席に元理事長池坊稲田ユキエ先生への供花の白菊が、遺影と共にお弟子さんによって生けてありました。長年にわたり、華道、茶道を歩んで来られた先生に会員一同、先生の会へのご功績に対して手を合わせご冥福を祈るとともに、感謝申し上げました。

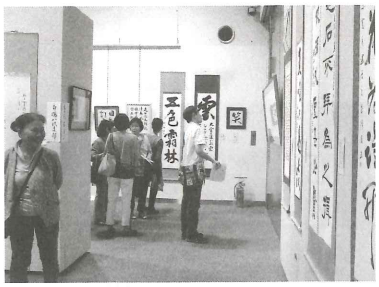
また、隣の研修室では未来を担う小学生から高校生までの（それぞれ）作品が並び、観覧される人々が微笑ましくも感心して見ておられ、成長ぶりが見え、頼もしく思いました。いけばな体験コーナーもありました。観覧にみえた市民のうち二日間で希望者四十名の方に体験して頂きました。

初日には、八代市長、市議会議員、県議会議員の皆様方が訪れて体験されました。思いのほか上手に生けあげられ、指導者もビックリ！終始、笑顔で和やかなひと時となりました。

初めてだという市民の皆さんや小さな子供達も、最初は不安げでしたが、生けあがると満面の笑みを浮かべて、嬉しそうに大切に持って帰られる姿を見て、大変嬉しく思いました。

このように、様々な事があった今年の文化祭いけばな展でしたが、会員皆、来年も更に頑張っていこうと誓いました。

▼白竜会展



▲書道連盟展

文化祭特集

文化祭実行委員一年生

日舞百合の会　藤間州為（白石有為子）

「文化祭には出演しているのに、委員を一度もしていないのはおかしい。今年は新しい人になってもらいたい」との言葉にドキッとしました。その通りで合併後、平成十九年度から参加させてもらっているのに、委員には一度もなっていませんでした。というより私ごとき新参者が役員などとんでもないと思っていました。でも言われてみると、ただ参加しているだけでは申し訳ないという気持ちも起こってきました。まだしていない団体が読み上げられ、何もわからないままお引き受けすることになり不安がいっぱいでした。

そして、文化祭が終わった今、「実行委員としてあなたたちは何をしたの？」と問われると、はたと考えてしまいます。お受けしてから今まで一体何をしてきただろう？　月一回の常任理事会、実行委員会に出席すること、そして市制十周年に当たる今年、日舞部門で愛唱歌「わたしのまちは」を踊ったこと、オープニングの行事に参加し、二日間の当番をしたことぐらいでしょうか。委員会は出席するだけで色々な報告を確認することぐらい。唯一したなと実感できたのは、聖先生の振り付けで「わたしのまちは」を練習し、会の最後に踊ったことです。「実行委員が一つにまとまり発表できればいい」という先生のお考えで、先生のお宅でのお稽古が始まりました。残念ながら健康上の理由で、一人脱けられ四人での発表になってしまいました。残り三名、聖先生のご指導の下、それぞれのいつものお稽古では得られない貴重な体験と勉強をさせていただきました。

出来はどうかわかりません。「よく踊ったねー。よかったよ」と師匠に褒められたのが一番嬉しかったと報告されたHさんの言葉に、初めは消極的だった自分自身が反省させられました。

七十一団体一六一四人参加の文化祭を、とどこおりなく終えることができたのは会長先生を始め執行部の方々、それを支える実行委員一人一人は微力ではあるけど、それが大きな力となって文化祭を作り上げているのだということを実感させられました。ここまで作り上げ続けてこられた先輩の方々のご苦労を改めて感じました。

これからも、この八代の文化祭は続いていくでしょう。それも実行に係わる人、支える人あってこそ成り立つ文化祭だと思います。

「参加する以上は一度は委員になって欲しい」先輩の言葉に引き受けましたが、参加するだけの方がいかに楽か、参加する以上は、一度は委員になってみて大変さを味わうべきだとつくづく感じました。

実行委員一年生のつぶやきです。

▼書道展

▲八美展

▼市民写真展

文化祭特集

文化祭を省みて　反省会より

平成二十七年度の文化祭も、九月六日(日)の俳句会を筆頭に、十一月八日(日)の菊花展、書道展(日本習字)、合唱祭を最後に、総計一万一千余の来場者を迎えて終了した。

十一月二十七日(金)、ホワイトパレスにて全体反省会が行われた。主催の八代市、八代市教育委員会、八代市文化協会、展示場所や博物館等への感謝の言葉も各部門で多々あったが、気づきや意見、要望等各部門ピックアップして掲出した。来年度への参考になさってくだされば幸いです。

展示部門

・文化振興課、博物館の職員の皆さんにお世話になり感謝。今後七夕展六十回展を目指し、準備を積み重ねてゆきたい。(書道)

・会場は、メディアからの宣伝効果もあり、来場者は多数で盛況だった。五十周年として充実した展覧会となり、関係機関に感謝。(美術)

・どの席も和やかな交流の場であった。しかし参加者、来場者の減少が感じられ、会員増が今後の課題。(茶道)

・会場の照明や花の配置を工夫した為好評だった。受付場所が暗いのが難点。子ども体験教室は、四十人分の花が足りない位喜んでもらえた。(華道)

・ハーモニーホール一階展示は、部門のバランスに工夫を。(翠流会)

・今回はスムーズに事が運び、楽しい展示となった。(手織教室)

・関係機関の皆様のおかげで無事終了。感謝。(日本原色押花)

・会員の高齢化、会員配偶者の健康阻害で、作品の提出数が減少傾向。気候の影響を受けるので、展示時期と開花が合わなかった。展示会場の各部門間の協力、連絡もうまく行った。(寒蘭)

・関係者に感謝。準備、片付け等終始和やかに開催できた。関係者以外の一般のお客様にももっと多く来て欲しいし、子どもや若い人が来場しやすい工夫も必要かと。(まちの先生派遣と絡めての企画とか)(TMCAキャリアアップスクール)

・文化祭に参加して日頃の練習を展示させて頂き感謝。(彩光＝日本習字書道)

舞台部門

・開会式での「わたしのまちは」の合唱がよかった。(八代尚和会)

・出演者は未着席で、マイクも来ていないのに、司会の方の紹介が始まり「どうぞ」と言われたが、始められずタイミングが悪かった。

終了後全員緞張が降りきるまでお辞儀をしてと決めていたが緞張が降りない。(美月会)

・各役員の対応が素晴らしかった。

改善点として、来場者の増加を図るうえでも新規参加団体に対してのアピールを広く行ってはどうか。会議の時間短縮を。裏方の役割についての説明をもう少し詳しく。駐車場は来場者を優先するよう、各団体申し合わせをする。

文化祭会場の場所を知らせるのぼり旗等立ててはどうか。

オープニングには会場参加者が少なかったようで、参加団体に数名出席を働きかけてはどうか。

出番待ちが混み合わずによかった。早着替えに時間がかかる団体もあり工夫必要。

加入団体と未加入団体で発表時間に差があってもいいのでは？

・出場時、写真撮影のフラッシュで踊りにくかった。フラッシュ不可を入り口に立てる等の工夫を。

出演時の代表者の下に教室(指導)の先生の名前を掲載するとどこの先生の教室かが分かると思う。

文化祭パンフレットについて、確認の封書が来たので訂正部分を伝えたが、訂正されておらず残念だった。

足の不自由な方が居て、二階迄行くのが大変だった。又、

男性と同じ楽屋だったので着替えに困った。

舞台進行はスムーズに行ったと思う。緩張の効果は相半ばしたので今後の課題となった。曲と曲の間の道具の転換の流れにも一工夫欲しかった。（フラダンス）

・初参加で子どもたちも地元で踊れる事を楽しみ喜んでいた。

各関係者、そして裏方の先生方大変お世話になりました。（熊本バレエ研究会八代教室）

・新市誕生十周年を祝って、各部門で「わたしのまちは」が取り上げられていてよかった。全体的に質の向上がみられた。「雅太鼓」感動的だった。照明、音響、小道具、アナウンス等打ち合わせ通りで演奏しやすかった。（大正琴）

・控え室で女性の方が準備されるので男性十名困った。来年は配慮をお願いしたい。（吟詠）

・毛氈の上を子どもが靴のまま乗ってしまったようで以後気をつけます。（TMCAキャリアアップスクール）

・楽しく演奏できた。音響もよく客席によく響いたようだ。（ハーモニカ）

・男踊り女踊りゆかた姿と本来の踊りができたようだ。（植柳保存会）

・来場者が少ないように感じた。子どもたちの出演が多くよかった。（路の会西崎流）

・舞台打ち合わせで、打ち合わせ通りしっかりして頂いてよかった。（百合の会）

・来場者も増え、すばらしい合唱祭だった。各団体特色があり、レベルアップを感じた。会場の皆さんと歌った「手のひらに太陽を」「わたしのまちは」で一体感に包まれた。

八代の文化の底上げにつなぎたい。（合唱）

・予定していた広い部屋から、都合で急遽狭い部屋になったが、広さとしては丁度よかった。

高齢者が多い為、できれば一階で、と意見も会員から出た。

期日については、連休を避けて十月第三日曜日（十月十六日）を希望したい。

（髙木・記）

文化を想う

わたしの九年間を振り返って

西崎流路の会　鏡中学校三年　薙　優里

私と日本舞踊の出会いは、今から約九年前の夏に遡ります。今の私の師匠、西崎路先生が私の家を訪問して下さり、楽しみに心を躍らせながら稽古に行ったことを覚えています。

最初の稽古場所は赤星公園の広間でした。正座の仕方や扇子の振り方、すり足など、日本舞踊にはかかせない礼儀作法を教えられた後、「島のブルース」という演目の一フレーズを教えられました。この演目が後の私の初舞台で踊った演目になります。

初めて習った時は、踊ることよりも初めて学校以外の友達と話せることの方が楽しくて踊りを覚えることよりも、初めて話す友達と遊んだり話したりしていることが多かったように思います。

そして、何回かの稽古でその演目を一通り習い終えて、月に一回の稽古が週に一回になり、思ったよりハードな稽古が続きました。上手くいかなくて何度も叱られ、小さい私達が移動しやすいように舞台の構成をしてくださった先生は改めてスゴいと今更ながら思います。

そして本番。自分たちの番が来た時に上手く踊れるかとか失敗はしないかとかずっと考えながら踊っていました。上級生の方々が私達をリードして下さるものの、やはり失敗はつきものらしく、女の子が自分の「お花

かご」が見当たらず、舞台そでに退場してしまいました。舞台上では気付かなかったものの、そこだけは異様に目立ったようでした。でも自分自身の失敗がなく、周りの大人の方々からもおほめの言葉をもらい、うれしく思いました。

しばらくの間、日舞の稽古は続き、幾度となく、舞台の上に立たせていただきました。その舞台の中でも最も緊張したのが二〇一五年一月三十一日に開演した伝統文化発表会でした。「羽根の禿」という長唄の演目を一人で踊りました。母の着物を身にまとい先生からお借りした羽子板を手に持って初めて一人で踊ったのですが、途中、振り付けをド忘れしてしまい、あ

せりながらも冷静に次の振りを思い出しながら踊っていました。

そしてこの演目が終わり退場する際、会場から割れんばかりの拍手が私の耳に入ってきました。これには私もたえられず、舞台そでに着く前に涙が頬をぬらしていました。緊張と不安が無くなり、ほっとしたと同時に出た涙だったと今は思います。

後々舞台のことを先生に伺ったところ、「とてもキレイだった。素晴らしかった」とおほめの言葉をいただくことができました。

そして中学三年生になって〝ゆかたざらい〟など、様々な行事に参加しましたが私にとって一番の特別行事というと、やはり学校の文化祭でした。

学校の先生や西﨑路先生、家族と相談をし、やっと踊るということが決まりました。踊るとなるとやはり稽古が必要になってくるのですが、吹奏楽の練習やテストもあり稽古をほとんどすることなく本番をむかえました。

稽古していないという不安と周囲の目と緊張が身体の中を駆けめぐり、舞台の上に立った時はプレッシャーでつぶれそうになるのをおさえるのに必死でした。

演目が市民文化祭で踊った「羽根の禿」で振りは覚えていました。でも脳は覚えていても稽古していないことが祟ったのか、最初のところで身体が思うように動かず、あせってしまいました。ですが、踊りの中盤に入るとなんとか身体がついてきてくれました。

そして大体の踊りが終わり、最後の見得を切るところで後方のところで拍手が起きました。母と先生が見てくれていたのです。着付けの手伝いに先生をお呼びして着付けてもらい、それだけでもありがたいのに拍手まで下さって感動のあまり涙がこぼれそうでした。

曲が終わり正座をして礼をしたところ、会場の生徒ほぼ全員が拍手をしてくれました。感動のあまり市民文化祭の時と同じように、舞台そでに着く前に泣いていました。

今更ながら本心を言うと実際やりたくありませんでしたし、乗り気でもありませんでした。でも踊ってよかったと今は心からそう言えますし、自分にも自信が持てました。

着替えが終わり、色んな人からおほめの言葉をいただくことができました。

私にとってこの文化祭は皆さんが思っている以上に心に残るものになりました。

時にはやめたいとかつらいとか上手くできないと思うこともありました。出来なかったところを指導して下さる先生に対して失礼な態度をとったりしたこともありました。それでも指導して下さった先生は私の恩人です。また、どんな時にでもそばに居てくれて支えてくれた家族も私の恩人です。うまくは言えないけれど、私は日舞をやっていて、本当によかったと思います。これからもやっていきたいと思いますし、それに、この日本文化を尊重し周囲に広めていけたらいいなと思っています。

今まで支えて下さった周囲の方々、西﨑路先生、そして家族に心から感謝したいです。今までありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

文化を想う

硯との出会いと愛硯

熊本県書道連盟会長
八代書道連盟　顧問　江口幹城

文房四宝（硯・墨・筆・紙）の王者である硯については、和硯の「雨畑硯」ぐらいしか知らなかった私が、大学三年の時、当時・書道科主任教授横田小竹先生の引率で福岡市内の硯蒐集家宅で、端渓硯十数面を鑑賞したのがはじまりである。

卒業後、天草高校書道教員時代に宋端渓硯を一面購入し、数年後、結婚した養父の江口巖（雲峰）が端渓硯など数面所有しており、その中に宋時代の大書家蘇東坡使用の宋端渓雲龍大硯が含まれている。

その後、村上三島先生（日本芸術院会員）に師事し、同門下の熊本市内の硯蒐集家の谷本峰雲氏との出会いがあり、会社の重役室や自宅で、各々数十面の端渓硯や歙州硯について説明され鑑賞することができた。数年後、日本の代表的な硯蒐集家で「端渓硯」、「歙州硯」についての書籍を出版された恩師相浦紫端先生に谷本氏の硯を鑑定して頂く機会に同席して、更に硯について勉強することができ、硯の魅力に取りつかれてしまった。

平成七年、尚絅大学に書道コースが設立され、主任教授に就任することになり、「書学概論」で「文房四宝」について講義するはめになり「百聞は一見に如かず」で、硯を毎年一、二面購入していた。数年後、先述の谷本氏が他界され、奥さんより依頼されて、硯を中心に処分される折、お手伝いをすることになり、その時、私も数面購入したので、唐硯の代表的なものは殆ど揃うことになった。

硯と云えば、私たちは、石材しか思い浮かべないが、外に陶硯、漆硯、鉄硯、銅硯、玉硯、瓦硯、瓦当硯、磚硯などがある。

これらの硯の中では石硯が一番多いが、大別すると唐硯（中国）と和硯に区別される。良硯の条件をすべて備えているのは唐硯の方で、その条件とは次の通りである。

㈱「硯の八徳」について

①温＝氷点下になっても凍らない。

②潤＝水をためていても浸みこまない。

③柔＝墨と硯面が密着してなめらかに磨れること。

④嫩＝墨を磨っても堅い音がたたないで自然になめらかに磨れる。

⑤細＝墨汁の粒子が細かく表面に油のようなギラギラしたものが浮かない。

⑥賦＝筆鋒（筆の穂先き）が消耗しないでかえって書きやすくなる。

⑦潔＝墨汁を拭きとった時に墨を磨った跡かたが残らない。

⑧美＝美しい（石文・石音・形体など）と云うより硯の鋒鋩が鋭く、よく溌墨（すり上がった墨色の光沢、のび具合、墨色が美しい）し、硯堂（面）がすり減らない。

ここで、唐硯と和硯の歴史について簡単に述べておきます。

中国では、秦時代の陵墓から出土した硯が最も古いと云われている。また漢時代の硯も発見されており、前漢のものは砕墨石（研墨石）を使用して石墨や墨丸を磨りつぶして墨液を作っていたようです。そして後漢の延熹三年（一六〇年）銘文のある硯は円形で、平板な硯は三足と蓋の付いたものとなり、三国時代から六朝時代には、漢時代の石硯や陶硯を継承しており、隋・唐時代になると円形の多足硯は足の数が大幅に増え、唐代中期には端渓石や歙州石が発見されている。唐代後半から現在の硯に近い硯面（硯堂）に墨を磨るところと、墨汁をためるところ（墨池）を斜面にしたものが多くなったようです。五代を経て宋代になると急速に作硯技術が発展し、周時代から約千二百年を経て、長方形で硯堂と墨池にはっきり二分された硯の形態が確立したようである。

日本の硯の起源についての文献上には、ハッキリした記録はみられないが、中国と日本の往来は、すでに漢魏の頃よりあったので、応神天皇の十五年（四

〇〇年ぐらい）に百済から王仁が来朝し、論語と千字文を携えたとあるし、推古天皇の十八年（六一〇年）には紙・墨の製法が伝えられたとあり、遣隋使や遣唐使の往来もあったので、飛鳥時代（五九三～七〇九年）には確実に硯が伝来していたと考えられる。

唐硯の代表的なものとして、端渓硯・歙州硯・洮河緑石硯・紅糸硯・松花江緑石・澄泥硯・玉硯・陶瓷硯などがある。

(1)　端渓硯

中国・広東省高要県肇慶市付近から産出され、山の高い所で採掘された山坑（巖）の上巖・中巖や水面下の水巖があり、採掘された坑により、宋坑・麻子坑・老坑・大西洞などがある。清時代に入ると、端渓山の北嶺に、緑石坑・梅花坑があり、緑石坑の硯を緑端と呼ばれている。

(2)　歙州硯

江西省婺源から安徽省歙県にかけての山脈から産出する硯で、この辺りを徽州とか歙州と云ったところから歙州硯と云った。この硯を産出する山を龍尾山とか羅紋山と云い、真黒な石を龍尾系と云い、青碧・淡青黒・灰青色・黄褐色の文様のあるものを羅紋系（硯）と云っている。

(3)　洮河緑石硯

甘粛省臨漂県臨洮付近の洮河の河底から宋代に採掘されたと云う。この洮河の氾濫によって河流が変わり採石場を失い、宋代の古硯は幻の硯となり、宋代以後は採石がなく絶えてしまった。有名硯のほとんどが蘭亭硯か蓬莱硯と云われている。

(4)　紅糸硯

山東省青州付近の黒山から産出する石で、黄褐色の紅色の糸状の斑文を描いている硯で鋒鋩が弱い。

(5)　松花江緑石

東北吉林省扶余県付近の松花江流域上流の砥石山から産出されており、乾隆帝（一七一一―一七九九）の推奨によって有名になったが、清朝末期には採石されなくなったと云われている。

(6)　澄泥硯

中国では漢代―六朝時代にかけて、陶瓷硯（陶土・磁土を焼いてつくった硯）が作られた。また瓦当や磚のように陽干しのレンガのようなもので、澄泥硯はその中間的な製法による硯であるが不明な点が多い。しかし、一応「河中の埴泥を取り、水中でもみ、甕の中に貯える。目の細かい絹袋に入れて清水で濾過する。取り出して乾かし黄丹団を加えてよくもみ、その後、型に入れて成形し、竹刀や刀で彫琢し稲糖と黄牛糞の中で乾かし、窯に入れて焼く。その後、黒蠟に入れて米酢で数回蒸して仕上げる」と云っている。

種類として、㋑鱔魚黄・㋺蟹殻青・㋩蝦頭紅などがある。

(7)　玉硯

玉製品で乾隆時代には盛行した。

(8)　陶瓷硯

陶土、磁石で焼いた硯で、三国時代から盛んに作られている。唐時代には、三彩釉など釉薬のかかったものが出土されている。明・清時代には、染付・赤絵・金欄手・粉彩・均窯などが産出されている。

以上の硯の形や模様などにより、天成硯と彫成硯に二大別される。

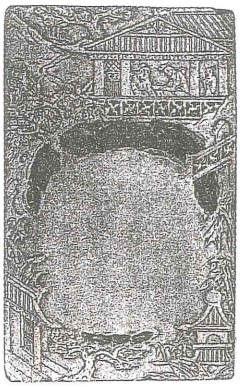
㈠　天成硯＝自然の形をできるだけ生かし、わずかに底面や墨道（硯堂）の部分に手を加えただけの硯で、自然の形のときに、すでに愛玩するに足る美しい形をしている。

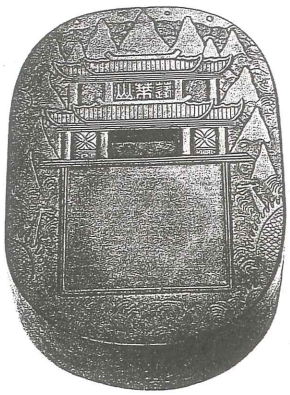
㈡　彫成硯

(1)　外形＝長方硯・方硯・円硯・楕円硯・六陵硯・八陵硯など

(2)
硯池＝硯板・方池硯・石渠硯・太史硯・門字硯・風字硯・井田硯など

(3)
彫刻＝蘭亭硯・蓬莱硯・雲龍硯・琴硯・壷硯・竹節硯・動物硯・植物硯など


宋瑞蘭亭硯


鱔魚黄澄泥蓬莱硯

八代市文化祭書道展に展示した諸硯石

一、端渓硯
①宋瑞雲龍大硯（蘇東坡旧蔵）
②宋端渓蓬莱硯（太史式）
③端渓夔龍硯（坂東貫山旧蔵）
④端石灰蒼色蓬莱硯
⑤端渓雲月硯
⑥緑端蘭亭硯
⑦緑端渓硯
⑧端渓硯（眼）
二、歙州硯
⑨歙州長方硯
⑩歙州金暈板硯
三、洮河緑石硯
⑪洮河緑石蘭亭硯
四、紅糸硯
⑫紅糸硯
五、松花江緑石
⑬新松花江緑石硯
六、澄泥硯
⑭鱔魚黄澄泥硯
⑮鱔魚黄蓬莱硯
七、玉硯
⑯灰玉硯
八、陶硯
⑰呂均窯陶硯
九、瓦硯
⑱瓦様硯

文化を想う

チャレンジ

日本民謡八代尚和会　久保田　尚夫

「お父さん、それでは歌えないよ」

懸命に三味線の練習をしている私の後ろから、家内が声をかけた。確かにおぼろげにメロディは弾いているが、歌えるようなものではない。高三で私の民謡会に所属するR子が採譜してくれた三味線譜である。

おかしいと思い、調べてみたら、それは、歌のメロディではなく、バックに流れる伴奏の方であった。さらに調べたら、何とメロディの方の採譜は、昨年R子が、すでに作ってくれていたのである。私が忘れていて、今回採譜したのが、メロディの方だと思って、練習に入っていたのである。再度練習のやり直しとなった。

これは「わたしのまちは」という歌で、平成二年、八代市制施行五十周年を記念して、河島渉作詞、円応志作曲で作られた曲である。

歌詞を一番のみ紹介しておく。

私の町は大きな川が
微笑みながら流れています
昨日の疲れはとれたかい
元気で一日やれるかい
今日も朝日に手を振りながら
大きな川が流れています
空から鳥の歌声が
私の八代私の八代

今年が八代・鏡・千丁・坂本・東陽・泉の合併十周年とのことで、市がこの曲を「八代市愛唱歌」として認定したという。

その曲を私の主宰する民謡会で八代市文化祭の出演曲として出したい、と考えたのである。

歌はともかく、三味線ができるようになるのか？　リードする私が弾けなくては問題にならない。歌い手二十人、三味線十人のメンバーである。文化祭の出演曲の提出期限まで、一週間しかない。

「とにかくチャレンジだ」と、この曲に集中しての準備となった。R子の採譜してくれた三味線譜に、弾き易いように、適当

に修正しながらの練習となった。静かで、三分位の曲だが、メロディだけのものは、比較的練習しやすい。

私のメモからひろうと、

・原曲に忠実に採譜しているようだ。三味線は連続音ではないので、特に「間」が大切である。

・最も難しいパートをやる。回数をこなすことだろう。二百回で少しはよくなるだろうか。

・新発見だ。「指の使い方」の要領がわかる。もう少し頑張るべし。いま三百二十回だ。

・一日中、同じ曲だけの練習は、とてもできない。

一週間で五百回の練習回数だった。どうにかできそうだ。そして文化祭で演奏する曲目として係へ提出した。三味線での演奏は初めてであろう。

その後、民謡教室で初めて演奏してみた。どうやら違和感もなく、歌えそうである。採譜は大成功であった。

今回の新曲準備は、短期習得で、力の入る貴重な体験であった。後は、三ヵ月後の文化祭での成果が楽しみである。

文化を想う

大正琴と私

あすなろ琴KOTO和会　松田洋子

ほほえみ乍ら、ささやき乍ら、輝き乍ら、流れている大きな川。おおらかで美しい詩とメロディ「わたしのまちは」のコーラスで始まった新市十周年記念の文化祭。私達は、大正琴で聞いてもらおうとしている曲。ただ無心に弾き終わった時、前の方の客席から「ワァー。よかったねー」の声が聞えた時、胸が熱くなるものを感じました。

私は、夫の実家のある鏡町に、義父の介護の為に帰って来て、背おい込んだ重圧、慣れない日常に戸惑い、悩み、焦り、もがいていた毎日でした。そんなある日の新聞チラシの中に「大正琴生徒募集」の一枚が目に止まりました。会場はすぐ近く、とにかく行ってみよう。夫の後押しもありました。生まれて初めて聞く大正琴の音色と、弾き易さにすっかり魅了されました。ちょうど、介護保険制度も始まり、それを利用し、家事をやりくりしながら、週二回、何とか自分の時間を作ることが出来ました。それからの私は、この大正琴に救われ、自分を取り戻すことが出来たのです。二十数年前のことです。

以来、当時の仲間四人や、指導の先生方、練習場所もそれぞれの事情で変わっていきましたが、今、あすなろ琴KOTO和会八代教室の三つのグループ二十人の中の一人として、数々のイベントや行事にも参加し、演奏させてもらっています。平成二十六年の最大イベントであったゼンオン九州大会イン八代では、地元ゆえの苦労も体験しました。会場設定や前夜祭、集客、演奏等々、主催者の方から嬉しい評価を戴いたことは、八代教室全員感激した事でした。

平成二十七年度は五月にスリーデーマーチ、十月の文化祭、日奈久駅ライブ、十一月には本会の発表演奏会、其の他、折々のサロンや施設訪問活動等での演奏で、出番の多い年でした。時には先生の厳しい指導に、落ち込むこともしばしばですが、苦にしたことは一度もありません。演奏後の反省会や楽しい食事会、先生のねぎらいの言葉、その総てに感謝と充実感と達成感があります。文化の香り高い八代で、生きていくこと、大正琴と関わっていることの幸せと誇りを噛みしめています。

ありふれた日々の部屋の片隅に「大正琴」があることの幸せは、私の生きがいとして、これから先も続いていくことを、切に望んでおります。

2015.11.12 ホワイトパレス

会員の活動

織るということ

井上伝統手織教室　井上典子

工房のラジオから聴こえてくる歌「♪縦の糸は貴方　♪横の糸は私　♪織り成す布はいつか誰かを暖めうるかもしれない♪」

「糸」中島みゆきの作詞作曲である。まさしく手織りと人生を重ねた興味深い大好きな曲である。作品を完成させる行程はその種類に限らず孤独な作業の連続である。人と集うのも楽しいが、一人で静寂に過ごす時も又、大切である。手織機は、新聞紙を広げた片面程の小さな木製卓上手織機で、足も使わず、音も出ない。延長機を取り付けると長いショールなども織れる便利でコンパクトに収納も出来る物である。縦糸は、何回も手前に往復して触れるので糸が切れない手織糸を使用するが、横糸は材質を選ばず、バラエティーに富む。庭木の小枝を集め、織り込んだら野趣溢れる作品が完成した。鍋敷きが不足した時にも使用可能である。手織りに憧れ、「鶴の恩返し」の物語りが大好きであった。

九年前の二月、小さな広告記事を見つけ熊本市まで通い受講し、資格を取得した。当時八代市在住だったので近くの麦島公民館をお借りし開講した。キャリアも無く開講に至ったのは、友人の一言であった。それは、「早く教えないと忘れてしまうよ!!」であった。五十二歳となっていた私は、納得し背中を押され、現在に繋がっている。有難いと日々思いながら暮し、好きな事を人様に教えられる喜びも得ている。開講以来、年に一回作品展を本町ギャラリーやゆめタウンなどで開催していたが、本町ギャラリーの閉館に伴い、八代市文化祭に参加させて頂く事になり昨秋で三回目を終えた次第である。

ハーモニーホールの多目的ホールは高い天井と広々空間で晴れやかな会場である。日々地味な作業の手織りの御披露目には嬉しい限りの会場である。教室生の方々の瞳も一段と輝いて見えるのは決して錯覚ではないと感じている。月に一回の三時間の講習で毎回新しい技法を各々に伝達している。

次回教室時には、完成された作品を手にされ、苦労話や、工夫された話などを聞きながら作品を検査する。基本的技法を指導するがそれからは、その方々の個性が加味され、オリジナリティー溢れる世界へと拡がっていく。数年通われると作品を見るだけで、どなたかの作品と察しがつく程、色味などで個性溢れる作品と変貌するのである。それらの作品を手にする度に私自身醍醐味を感じ、教室生の方々と出会えた喜びを感じるのである。手織りと出会えたお陰で人生後半を楽しく歩める事に感謝している。又最後になりましたが、八代市文化協会に入会させて頂き、文化人の仲間入りが出来た事に教室生一同、感謝しております。これからも宜敷くお願い申し上げます。益々の八代市文化協会の発展を祈念致します。ありがとうございました。

◀▲ハーモニーホール展示場

会員の活動

八代盆栽愛好会のこと

八代盆栽愛好会　畑中正人

私たち愛好会は、以前八代に二グループの会がありました。これを一グループにまとめて発足して十年以上経過したと思います。当時は二十人以上の会員がいましたが、現在は十一名、ほとんどの人が昭和二桁生まれで構成しています。

年間行事としては毎月一回例会、何人かの人は年に二回展示会に参加しています。

若手の愛好者会員を募集したいと思います。

盆栽を初めて、お気に入りの樹木が少しずつ増えていくのは大きな楽しみです。しかしある程度の数になると、年間を通じての計画的で的確な手入れが必要となってきます。

以下に紹介する月別の作業例を参考に、自分の生活スタイルと相談して無理のない範囲で楽しむことです。

盆栽は、犬や猫などのペットと同じく愛情を持って育ててやらないと生きていけない。

植物は、もの言わぬ存在ですから育てる人は日々の細かい観察眼が必要です。盆栽には完成型という言葉がありますが、理想の樹姿に向け努力に終わりはありません。

〈年間の作業内容〉

一月　配置と鑑賞、保護室のいろいろ、樹の状態と水やり、剪定と針金かけ
二月　冬季消毒、植え替え
三月　植え替えの手順
四月　花もの、実もの開花と手入れ、春肥え
五月　実もの、花もの、管理、消毒
六月　松柏の芽刈り、花ものの花後の剪定
七月　殺菌、殺虫剤消毒、水やり一日二回
八月　夏場の水切れ対策、水やり一日二回
九月　ボケ類の植え替え、秋肥え
十月　展示会出品樹の手入れ
十一月　松、柏の葉透かし
十二月　剪定針金かけ、冬季消毒

会員の活動

第十回八代おざや節全国大会を終えて

日本民謡協会八代支部　支部長　椿　日登美

この度、八代市鏡文化センターで、第十回八代おざや節全国大会を開催するにあたりまして、沢山の方々にご支援をいただき、誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

今回、第十回八代おざや節全国大会は、昨年よりも五十名ほど増え、二〇三名の県内外の参加者で、最高年齢者は、九十六歳（合志市）最年少は四歳（菊池郡）、グランプリには、八代市の山下法子さんが、受賞されました。

また、アトラクションでは、ロビーでは、農協の地元の野菜、漁協の牡蠣の販売などがあり、さらに賑わいをみせました。

八代おざや節は、江戸時代初期から行われた八代干拓事業の中で生まれ、古くから歌い継がれた民謡で、多くの言葉で語るよりも、その歴史や文化を活き活きと私達に伝えているのではないでしょうか。

さらに、当大会を開催する事で、「先人たちの血の滲む様な努力で、今や八代平野は、日本有数の農業地帯となった」と言う事を伝えていく事が、愛郷心の育成にも繋がっています。「八代の文化の発展と地域の活性化」を目的とし、この八代おざや節が永遠に唄い継がれ、益々全国に広がっていく事を願います。

会員の活動

♪「歌の街へ　ようこそ！」丸七年♪
東日本大震災にも縁をつないで

コールアニマ　村井智子

最近、「生かされている」という言葉を実感している。

幼い頃から音楽をする環境に恵まれ、音楽に携わる仕事に就いている私。声楽・合唱の伴奏ピアニストとして、多数の演奏会に立たせてもらっている。

声楽のピアニストとして、色々な先生にレッスンを受けると声を揃えて言われるのが、『ピアニストは、歌い手以上に歌を知ることです、勉強することです』それ故、私も声楽のレッスンを受けながら練習し、弾き語りで歌えるようにまでなってくると、だんだんそれが、たのしくなってきていた。

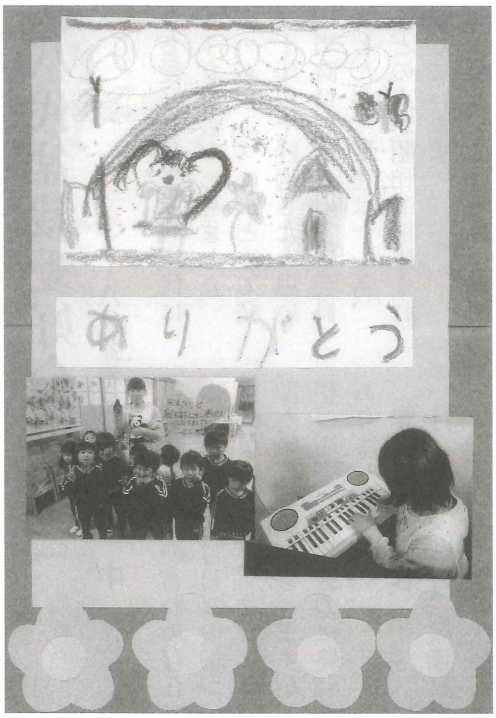
七年前になるが、タイミングよろしく「歌の街へ　ようこそ！」の弾き語りイベントを始める機会を頂いた。三ヶ月毎の開催で、今年の一月十二日に二十八回目となった。すばらしい仲間の協力で、毎回参加される皆さんと音楽を楽しんでいる。五年前の東日本大震災後からは、参加者の協力金の一部を義援金として使わせて頂くことにした。平成二十五年六月には、岩手県釜石市、平成二十七年十一月には、宮城県気仙沼市を訪れ、被災地の現状を見ることが出来、その際ご縁をつないだ『かまいしこども園』へ直接、支援金を送り、目に見える支援の形に現在はなっている。

こども園園長藤原先生を八代に二回もお呼びすることができ、参加された皆さんとこども園の開園や子ども達の笑顔を喜び合えている。

また、気仙沼市へは中学校でのコンサートだったが、全員の感想文には、音楽の力を実感する言葉が沢山あり、心の底から嬉しさが込み上げてきた。行って良かったと思える幸福感を味わった。

自分の意志より前に、自然に周囲が、今のこの状況を作ってくれているように感じると共に『私が生かされている場所が、ここに在る』と感謝している。

四月には、二十九回目を予定している。



かまいしこども園

▼合唱祭

▲合唱祭

▼合同お茶会

会員広場

初心者

熊本県文化協会協力会員　増田國夫

私方自宅玄関横に「忍耐努力之碑」がある。父英夫（八十歳没）の「剣道・銃剣道・居合道」三道範士・勲三等受章を記念したものである。父は国士館専門学校（現国士館大学）で剣道を学び血の滲む修練を積み学校剣道教官、厚生省体育官、陸軍戸山学校教官（剣道・銃剣道・居合道）として勤めた後政治の世界に携わりましたが、「剣の心」を拠（よりどころ）として生涯を送りました。

或る時父が自宅庭で柿木を見て「柿木の枝は折れた時先端は刀の切先のように尖っていて『静』の中に『動』がある」と語りましたが私には父にしか解らない「真理の世界・道」に思えた。「持田盛二先生遺訓」に「剣道は五十歳までは基礎を一所懸命勉強して自分のものにしなければならない。普通基礎というと初心者のうちに修得してしまったと思っているが、大変な間違いである。私は剣道の基礎を体で覚えるのに五十年かかった。私の剣道は五十を過ぎてから本当の修行に入った。心で剣道しようとしたからである。六十になると足腰が弱くなる。弱さを心を働かして弱点を強くするよう努めた。七十になると身体全体が弱くなる。心を動かさない修行により相手の心がこちらの鏡になって映ってくる。八十歳になると心は動かなくなった。時に雑念が入る。心の中に雑念を入れないよう修行している」とあります。

剣道は剣の理法の修練による人間形成の道であり「人格の完成と国家社会の有為な形成者の育成」の教育と同じものを感じます。剣道は一つの山を越えると次々に山が待っていてその先は雲の「山々雲の世界」の哲学的求道の道と思っています。

一般論として西洋哲学は論理で構成され論理で理解されますが、東洋哲学は論理（知識）が体験（修行・修練）を通して体得される場合が多く体験は言語により伝達不可能のため自らの体験により体得する以外にはないと思われます。剣道の場合、「気剣体の一致」をいくら論理で理解しても「心と技」の修練無しには平常心・自然体の礎（もと）になる無心・胆力・捨身の体得は不可能であり修練の過程で生じる煩悩や雑念の払拭は奥義を極められた師が自らの魂で子弟の魂に火をつけ魂のやりとりで伝授されることが多いと思います。

剣道の初段から八段の昇段審査は修練の錬度により受審しますが、平成二十五年五月二日の八段合格者は受審者一〇一一人中七人(澤田洋一氏合格)でした。

八代市剣道連盟名誉会長であられた緒方敬夫先生（剣道範士八段九十二歳没）は八代水曜稽古会で高段者の育成に力を注がれました。先生はご自身の剣道の理法の修練による「技」と坐禅（自力）、般若心経（空）、葉隠（武士道）の「心」の修行で体得された平常心・自然体の境地により指導されたと理解しています。六段挑戦中の一人が「先生、胆（はら）て何ですか？」と尋ねますと「君にはまだ解らぬ」と言われました。本人は修練を重ね六段に合格し七段を目指しています。

或る六段剣士は「四段受審の時、「技」には自信があったが心の雑念がとれないため「八段の先生から禅寺での坐禅を勧められ合格できた」と語り又、或る高名な八段の先生は「剣道とは何か。何のために剣道をするのか。自問自答し原点に返り素振りをしている」と述懐されています。剣道には三磨の位「習・工・錬（たん）」や五輪書の「千日の稽古を鍛と云い、万日の稽古を練（れん）と云う」等の幾多の教えがあります。

近くの川で「アメンボウ」が浮かんでいる。異変があると瞬時に難を避け次の瞬間の泰然とした姿に「静中動・動中静」の平常心・自然体の境地を感じる。

剣道を修行していない初心者の私は自宅近くの小学校剣道部活で子供達と汗を流していますが剣道の奥深い精神性と意義・価値の重みを噛み締めている。

会員広場

研修旅行に参加して

紫洲流日本明吟会熊本本部　松山和鳳

櫛田神社本殿

週間予報では気掛かりの天気も晴れて旅行日和に恵まれた十一月三十日、八代市文化協会研修旅行は図書館横の駐車場に集合し定刻の八時に出発して、一路福岡方面へ神園トラベルの三台・百二十五名を乗せた大型バスは走りました。

今年の研修旅行の企画に参加して役員皆様のお世話様に感謝します。

添乗員の案内で博多市内の、先ず博多祇園山笠の奉納神社・「櫛田神社」に到着、近くで見る山笠の大きさに驚きました。近くの「博多町屋ふるさと館」では博多の歴史や文化・商家に伝わる民具などの展示を見て、「博多伝統工芸館」の博多人形や博多織の紹介では来年の干支「猿」の博多人形の美しさに感動しました。

昼食は「福岡ヒルトンホテル」四階アトリュウムレストランのビュッフェバイキングで、グループのご婦人のサービスで満腹と幸せを満喫しました。

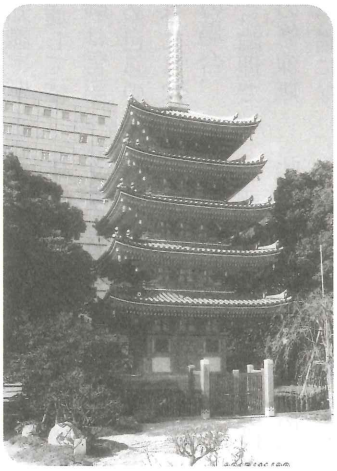
ゆったりの昼食時間で元気を得て、福岡藩主黒田家墓所「東長寺」の想像以上に大きい歴代藩主の御墓に驚き、境内の日本一大きい十六mの木造大仏にも感動しました。

観光会館はかたで買物して予定のコースで無事終了できて満足感とお世話いただいた関係者に感謝して、今後の吟詠活動に精進することを自身に誓った旅行でした。

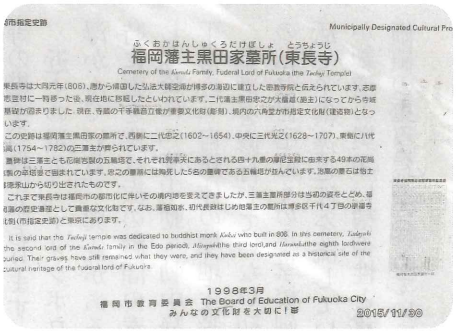
写真は松山丈三氏の撮影されたものを提供していただきました。

櫛田神社境内の山笠

福岡藩主黒田家菩提所・東長寺
（福岡市指定史跡）


東長寺境内五重塔

黒田家菩提所・東長寺
黒田家三代信之公御墓


都市指定史跡　Municipally-Designated Cultural Pro

福岡藩主黒田家墓所（東長寺）
ふくおかはんしゅくろだけぼしょ　とうちょうじ

Cemetery of the Kuroda Family, Fuderal Lord of Fukuoka (the Tochoji Temple)

東長寺は大同元年(806)、唐から帰国した弘法大師空海が博多の海辺に建立した密教寺院と伝えられています。近世、志賀島に一時移ったが、現在地に移転したといわれています。二代藩主黒田忠之の大叔父（祖父）になってから寺域整備が進められました。現在、寺域の千手観音立像が重要文化財（彫刻）、境内の六角堂が市指定文化財（建造物）となっています。

この史跡は福岡藩主黒田家の墓所で、西側に二代忠之(1602～1654)、中央に三代光之(1628～1707)、東側に八代治高(1754～1782)の三藩主が葬られています。

墓碑は三藩主とも石塔形式の五輪塔で、それぞれ開眼供養にあたるとされる四十九重の塔婆宝殿に由来する49本の花崗岩製の卒塔婆で囲まれています。中央の墓碑には角死した5色の墓碑である五輪塔が並んでいます。治高の墓石は他主と同様山から切り出されたものです。

これまで東長寺は福岡市の都市化に伴いその境内地を変えてきましたが、三藩主墓所部分は当初の姿をとどめ、福岡藩の歴史遺産として貴重な文化財です。なお、藩祖如水、初代藩祖ほか他藩主の墓所は博多区千代4丁目の承天寺（国指定史跡）と聖福寺にあります。

It is said that the Tochoji temple was dedicated to buddhist monk Kukai who built in 806. In this cemetery, Tadayoshi the second lord of the Kuroda family in the Edo period, Mitsuyoshi the third lord, and Haruhiro the eighth lod were buried. Their graves have still remained what they were, and they have been designated as a historical site of the cultural heritage of the fuderal lord of Fukuoka.

1998年3月
福岡市教育委員会 The Board of Education of Fukuoka City
みんなの文化財を大切に！

2015/11/30
黒田家菩提所・黒田家三代信之公
御墓の説明板

会員広場

秋の研修旅行

八代市合唱協議会　鶴　池　千佳子

待ちに待った八代市文化協会の研修旅行が十一月三十日(月)実施された。当日は快晴に恵まれ旅行日和となった。図書館横の駐車場にはバス三台に一二五名が乗り込んだ。スムーズにバスは進み最初の見物地である櫛田神社に着いた。福岡の祭りの折りにはよくテレビで放映されている櫛田神社は、重厚で威厳があり圧倒された。友達と丁寧に参拝をすませる。その隣には博多の祭りに使う物で十メーター以上もある「飾り山笠」が展示されていた。「こんな大きな物をよくも動かせるなー」と祭りを想像しながら感心した。

昼食は福岡ヒルトンホテルの豪華なバイキング料理、ホテルの中は天井が高く空に届くのではないかと思う程で、天井の先には青空が見えていた。レストランの椅子やテーブルも幾つもあって広い広い、私達一二五名の参加者も夫々自分の好きな所に座る事が出来た。食事はバイキングになっていてその種類の多いのにびっくりする。料理はお花畑のように並べられていた。主食のごはんやおかゆ、パン等も幾種類もあった。まず主食から皿に取りサラダ、魚肉等なるべく多種にわったって味をみてみたいと一つずつ少なく取るようにした。食べきらず残す事がないよう自分にあった量に心がけた。食後はデザートとコーヒーを飲もうと思って取りに行くと色とりどりのデザートがあった。きれいなワイン色のプリンを選んで友達と思わずおいしいと顔を見合わせた。

最後に東長寺（黒田家菩提寺）を見物した。とてつもなく大きい木の大仏様は日本一という、大仏の裏側には死後の世界を表すような闇夜が続いている通路を歩く所があり、不思議な体験もすることができた。バスの中では史談会会長の松山先生の話や、小寺先生の歌を聴いたり歌ったりして過ごした。楽しい旅行が出来た事に感謝いたします。

旅行プラン

博多祇園山笠奉納神社「櫛田神社」と博多町屋ふるさと館
博多伝統工芸館と福岡ヒルトンホテルのビュッフェランチの旅

【図書館駐車場】
八代 8:00 ――― 八代IC ――― 広川SA ――― 太宰府IC ――― 千代ランプ ――― 櫛田神社（博多祇園山笠の奉納神社）――― 博多町屋ふるさと館（博多の歴史や文化に関する展示・商家に伝わる民具など）――― 博多伝統工芸館（博多織や博多人形の紹介）福岡ヒルトンホテル（４Ｆアトリウムレストランにてビュッフェバイキング）――― 東長寺（黒田家菩提寺）――― 観光会館はかた（ショッピング）――― 太宰府IC ――― 広川SA ――― 八代IC ――― 八代17:40ごろ

文化庁 伝統文化 親子教室発表会

一月十六日 厚生会館で開かれる

参加団体は十四団体で二十一教室が発表した。

ホワイエで書道と華道の展示があり、力強い書やかわいらしくてのびやかに活けられた花などを来場者は見ておられた。

・親子いけ花さくら会
・いけばな桔梗会親子教室
・八代書友会　が出品。

お茶席は十時から、かわいい手付きで先生に付き添われてお運びをする童女もいてほほえましい光景であった。

三名の中学生に感想を聞いてみると五年間～七年間続けているがやはり難しい。でもおいしいお菓子が食べられる。本式のお茶席のお菓子はとてもおいしいと邪気のない答が返ってきた。

・親子茶道育成会（裏千家）
・親子教室表千家
・煎茶親子教室
・皇風煎茶親子教室　が参加。

一時十分から舞台での発表があった。

華やかで愛らしい踊り、八代おざや節のうまい節回し、物悲しい盆踊りと子どもたちの成果が次々と発表された。

・八千把教室（日本舞踊）
・郡築教室（日本舞踊）
・親子教室（日本舞踊）
・太田郷、鏡、金剛教室（日本舞踊）
・こども民謡スクール
・こども民謡教室恵女会
・植柳の盆踊、棒踊教室

（高木・記）

広告募集始めました！

あなたの会のお知らせやPRに！

○スペース
四段目
1／2マス＝一枠
（5×7.5㎝）

○基本料金（一枠）
三千円

〈申込み〉
原稿投稿先と同じ（P27）

史話連載

知っているようで知らない八代の史話

八代美術協会　萱嶋義邦

徳渕の津

「昔は前川に港があり、中国や琉球へと船が行ききしていた」〝徳渕の津〟

八代宮の参道を南へまっすぐに行くと川につきあたります。「前川」です。

萩原橋の下から球磨川は二つに分かれて、流れ八代海へと続いています。

前川に二つの橋（以前からの鉄橋と新しい前川橋）がありますが、このあたりを以前は「徳渕の津」（津…港）と呼んでいました。

中世以前は球磨川の一支流でしたが、野上・麦島の三角州が出来て、支流がとぎれてしまいました。

野上と麦島は陸つづきになってしまったのです。つまり上流から流れていた川の水はせき止められたという事です。

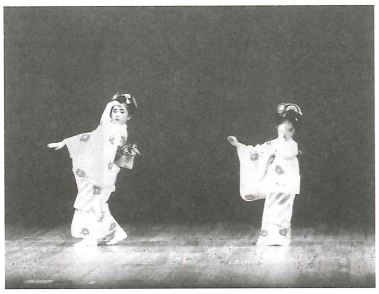
そこで徳渕の所は入江が出来てすばらしい港となり〝徳渕の津〟といわれるようになりました。毎日数百隻の船が出入りし、川岸には船の泊まる所や宿なども多く出来たといいます。

当時の八代の領主は相良氏でしたが、大きな船をつくり大陸との貿易を始めたのです。

その後、細川三斎公の時代に上流を開削して球磨川と結び、今の「前川」が出来ました。

八代の城の前の川なので「前川」と名付けられたのではないでしょうか。

平成27年
文化庁伝統文化親子教室発表会



会員の活動

こども達に感謝

植柳盆踊り保存会●野﨑陽子

今年度も無事に一年間こども達と保護者の皆様と保存会は、楽しく盆踊・棒踊を、文化庁伝統文化親子教室で体験し、例年の行事、お盆のふるさと祭り、植柳神社秋祭、文化祭、親子教室発表会に「子ども芸術祭二〇一五 in 菊池」と出演しました。

こども達の感想の一言が有りましたので紹介します。

〈楽しかった事が沢山〉

「菊池に行ったのが楽しかった。バスの中で遊んだ事」と有田葵衣ちゃん。

「ステージで踊った事」と有田未夢ちゃん。

「練習を皆で頑張って楽しかった。植柳の伝統がこれからも続いて行くといいな」と北原　稜ちゃん。

「私は盆踊より棒踊が好きです」と松永彩華ちゃん。

「色々なイベントへ出たり、棒踊・盆踊するのが良かった」と松永知寛くん。

「お母さんも棒踊が踊れる様になって」と松永和花ちゃん。

「色々な体験。花をさしたり、本だてを作ったり、その後、棒踊と盆踊を踊り」と稲垣　心ちゃん。

こども達は、植柳の盆踊・棒踊を楽しんでくれました。

最後に、三人の全文を紹介します。

「ばあちゃんと四歳の時、盆踊を踊ったから楽しかった!!

ばあちゃんと棒踊もしました☆小学生になったら、棒踊の足を頑張りたいです」と遠山楓ちゃん（5歳）

「私が楽しかった事

三年一組　あり田　れいか

ハーモニーホールで、ぼんおどりを、おどったのが楽しかったです。

音楽室の二階でぼんおどりの練習したのが楽しかったです。バスに乗って、おかしを食べながら、歌をうたったのが楽しかったです」と楽しいことがいっぱい。

「バスで菊池まで行けて、ステージでは、きんちょうしたけど楽しかったです。そして、ふだんできない本だて作りやフラワーアレンジメントなどやさしく教えてもらって、すごく楽しかったです」と五年生の木村七海ちゃん。

東京での「全国こども民俗芸能祭」に出演したこども達。又今年度「子ども芸術祭」に出演した子ども達に、感謝状を送りました。

地域文化への発信地として 文化の裾野を拡げよう

会報「文化やつしろ」72号 原稿募集

○投稿要項

▽原稿用紙　四百字詰め一～二枚程度も可

▽内　容　加入会員のユニークな提言、評論、随筆、芸談、苦心談、自分史、紀行、文芸作品、史談、写真。各団体の要望、事業計画など。

▽連絡先（住所・電話番号）要。問い合せにのみ使用します。

※文字原稿はお返し致しませんので、ご了承下さい。

▽締切期日　平成二十八年五月三十日

▽投稿先

①〒866－8601　八代市松江城町　一－二五
（八代市文化振興課内）文化協会事務所
☎33－4533　FAX33－4516

②〒869－4223　八代市鏡町貝洲一〇五四－一
（編集）太江田妙子　☎53－9705

③〒869－5141　八代市日奈久塩南町　五二－一一
（編集）甲田　智之　☎38－0294

④〒869－4211　八代市鏡町上鏡　二五九－三
（編集）髙木　容子　☎52－3430

表紙の言葉

「ホーホ…ケッキョ」春を目の当たりにして、さえずりの稽古が聞こえてきます。

そうだ、と松井神社へ行ってみると臥龍梅が微笑んでいるように思えました。「こんにちは」先ずはご挨拶。方々から眺め、自然体の姿を数カ所見つけて撮影しました。

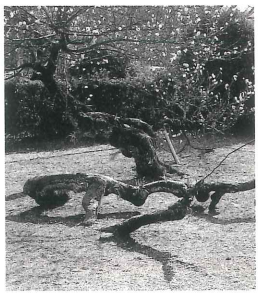
臥龍梅が住むここ松井神社は、八代城の北の丸だったところで、寛永十七年（一六四〇）七月、細川三斉（忠興、一五六三～一六四六）が数寄屋（お茶屋）を築き、庭園整備を進めました。

臥龍梅は、三斉が自ら植えたと伝えられ…と説明板があります。（松井神社）

三百六十余才のご老人でも、しっかりした花をつける姿に勇気をもらいます。手入れをされる方のご苦労をお察し致します。

大切に見守りましょう。

甲田智之



編集後記

今年の冬、久しぶりの銀世界でした。道のでこぼこも、屋根のビニールシートも、はげ山も白く厚化粧している。本物が見えなければこんなにキレイ。でも、それは数時間のことで直ぐ現実へ戻ってしまいます。

ワクワクして足跡を付けて回りました。そーっと振り向くと一人分の足跡。生活の中にも、こんな時間を作りたいものです。

今回は、私的に写真へのこだわりを持ったことで、会報編集に取りかかるのが少し遅れました。

いつも会報へのご厚意を背中に感じながら、皆さんの声を、姿を、心を伝えるのにどうしたものかと編集員一同工夫しています。

写真を入れたいけどスペースの都合で入れられなかったり、窮屈になったり…もっと編集技術を習得したいものです。

貴方の想いを、活動を、体験などをお待ちしています。

（甲田・記）

伝統文化親子教室発表会は、毎年この寒い一月に開かれる。

教室の紹介を見ると、対象が子どもたちの為、月四回、土曜日はフルタイムで教えられる先生たちもおられる。そうした先生方の指導で、子どもたちはそれぞれの分野で力をつけていくのだと、毎年のことながら頭が下がる。若い時には覚えも早かろうが、色々なご苦労もあろうかと思う。しかし、やがていろいろな事情で辞めてしまっても、大人になって時間的に余裕ができた時、若い頃の稽古を思い出してもう一回やってみようかな、と又、伝統文化に足を踏み入れる子どもたちもいるのではないだろうか。

子どもたちには勿論、先生方の地道なご指導にもエールを送った一日だった。

しかし、色んな詐欺行為、人を傷つける行為、海外のテロ行為を思う時、どうしてこんな大人になるのかしらと考えてしまう。

人間の持つ二面性が環境によって大きく変わるのであれば、〝子どもの貧困〟というこの言葉を死語とするべく、大人はすべからく努めなければならないと思う。

（髙木・記）

先日の熊日「読者の広場」欄に「人間には本来、三つの代表的心情がある。嬉しい縁に出会えば有頂天の心境になるし、嫌な出来事に出会えば怒りの感情が湧き、ひどい縁に触れたら修羅場を作りかねない、「ＩＳには制裁ではなく慈悲の心を」の投稿があり、強く心に残っていた。

その矢先の二月七日、北朝鮮がミサイルを発射し、そのニュースが世界中を震撼とさせた。世界中が怒り、ましてや日本も「制裁を」と騒ぐ。今複雑な心境である。

同日、鏡文化センターで「八代おざや節全国大会」が開催され、九十六歳から三歳までの二百余名の参加者が自慢の喉を披露された。中でも幼年の部の高見兄弟の出演は、会場を和やかにし、一層盛り上げた。その時、私と同じように、会場のすべての皆さんの心の中も、春の様に温かく和やかで幸せに充ちていたろうと思う。

この高見兄弟を含めて、全ての人がこれから成長する段階に於いて、慈悲の縁に出会い、文化的環境で豊かに育って欲しい。

全国おざや節大会がこれからも続きます様に祈念しつつ、文化に携わる一人として、人の心を和やかにする文化活動推進の手伝いをして行けることを嬉しく思う。

これも皆文化協会会員、関係各位の御協力、ご支援のお蔭だと感謝している。

皆様、原稿ご協力有難う御座いました。

（太江田・記）

文化やつしろ第71号
平成二十八年三月三十日
発　行　八代市文化協会
編集兼発行人　福田　秀俊
電話三二―二九六三
事務所　〒八六六―八六〇一
八代市松江城町一―二五
八代市経済文化交流部
文化振興課
電話三三―四五三三
（印刷　㈾緒方印刷所）